陳白沙と湛甘泉

志賀一朗

序

湛甘泉の師は陳白沙である。陳白沙の師は呉康斎で、呉康斎の師は朱子であるが、程子に負うところが多い。

理学は北宋に始まり、南宋に大成した。北宋には、邵康節(雍・一〇一一―七七)、周濂渓(敦頤・一〇一七―七三)、張横渠(載・一〇二〇―七七)、程明道(顥・一〇三二―八五)、程伊川(頤・一〇三三―一一〇七)の、所謂「北宋の五子」の理学家が出、南宋に至って朱子(熹・一一三〇―一二〇〇)が集大成し厳密な理学思想の体系を創立した。理学は道学とも称され、従来の儒家の学説である仁義道徳を理学の重要な内容に形成し、封建統治者によって、儒学の正統派と定められた。

一方これに対して、「宇宙は即ち吾が心なり。」を提唱した陸象山(九淵・一一三九―九三)の学派が出現し、この学派を紹述した王陽明(守仁・一四七二―一五二九)が陽明学派の基礎を作った。程朱の道学が官学に定められ、科挙のテキストになって以来、朱子学派は隆盛になったが、次第に科挙のための学となり、学者の思想を束縛し、現実から脱離してきた。ここに「心学」の必要性が再認識されるようになった。

陳白沙の早期の治学は、遠く孔孟に肇まり、近くは程朱を宗としたが、後来、陸象山の学説と老師呉康斎の影響を受け、独立の「心与理一」を提唱し、明代の心学の先河を開創した。黄宗羲(梨州・一六一〇―九五)は、「明の学は、白沙に至り始めて精微に入る有り。」(『明儒学案』「白沙学案一」)といった。

湛甘泉は、陳白沙が心性の学を講授しているのを聞き、自ら進んで白沙の門を叩き、挙業を放棄して、専心師の教えを学び、遂に白沙の心学を継承発揚した。以下、両者の略歴、学説、関係等について述べて行く。

一

陳白沙(一四二八―一五〇〇)は、諱は献章、字は公甫、石斎と号し、

諡は文恭。広東省新会県白沙村の人。先世は宋に仕え、南雄より新会に遷った。高祖は判郷、曾祖は東源、祖は永盛、渭川と号し、少きときより一刻者で、世事を省みず、好んで老子を読んだ。父は琮、楽芸居士と号し、読書は一目で数行先を能くし、詩を善くしたが、二十七歳で没した。没して一か月後に、白沙が生まれた。母の太夫人林氏の二十四歳の時である。林氏は節を守り、白沙を教育した。祖の永盛の時まで都会村にいたが、白沙に至り、白沙村に徙った。白沙村は広東省新会県の北二十里の所にある。後の世人は、白沙の道を重んじて、名を指斥せず、白沙先生と称した。

白沙は、明の宣宗の宣徳三年戊申（一四二八）、十月二十一日、都会村に生まれた。幼より警悟人を絶し、読書一覧する毎に、記憶した。身長八尺、眼光星の如く、音吐清円。少きとき、宋が厓山で滅び、諸臣が節に死んだことを読む度に、巻を掩って流涕し、又孟子の「有二天民者一。達可レ行二於天下一、而後行レ之。」（『孟子』「尽心上」）を読み、慨然として嘆き、「嗟、大丈夫行、當レ如レ是也。」といった。

十九歳で邑の庠生になり、師が白沙の作った文を見て、「陳生非二常人一也。世綱不レ足二以羈一レ之。」と異しんだ。英宗の正統十二年丁卯（一四四七）、広東の郷試第九人に合格、翌年挙人に挙げられ、戊辰（一四四八）二十一歳、辛未（一四五一）二十四歳の両年、礼闈に赴いたが、二回とも下第した。二十七歳の時、江右の呉康斎が伊洛の学を臨川の上に講じているのを聞き、会試を放棄して、崇仁へ行き、康斎に学んだ。

呉康斎（一三九九―一四六九）は、撫州崇仁（江西省臨川県）の人。名は与弼、字は子傅、康斎と号した。父は国子監の教官溥。八・九歳で既に物に屈せず、十九歳の永楽七年己丑（一四〇九）、父に京師（金陵）で会い、次年、太子の属官楊文定に就いて学び、『伊洛淵源録』を読み、慨然として道に志し、明道が心を驚動させて道を学ぶのを読み、明道こそ聖賢であると知り、「誰可レ不二學而到一也。」といって、遂に挙業を棄て、仕官を断り、小楼に独坐して四書五経や諸儒の語録を読み、二年間楼より下りず、読書に専念した。

康斎は性厳毅で、来学者とは全く共に語らず、先ず農耕に従事させた。雨中簑笠を被らず、耒耜を荷い諸生と耦耕し、『易』を談じたという。

陳白沙が広東から来学した。朝日が出初めると、康斎は穀物を簸りに取り掛った。白沙がまだ起きないのを見て、大声で、「秀才若爲二懶惰一、卽他日、何從到二伊川之門下一。又何從到二孟子之門下一。」といって戒めた。

康斎は屢〻出仕を請われたが、悉〻く辞り、出でては作し、入りては息い、実践躬行し、静時には存養し、動時には省察して、敬義、誠明両つながら進んだ。貧困と病苦に耐え、自粛自戒、恪勤精励して、聖賢の学を学んだ。

成化三年丁亥（一四六七）、白沙四十歳の年、再び太学に行く。祭酒邢讓は白沙に、宋儒楊亀山の作、「示二學者一」を試題とした。白沙は「和下楊龜山此日不二再得一韻上」を作った。内容は聖を学ぶ事を詠んだ。邢讓はその詩を見て、「龜山不レ如也。」といい、明日朝に颺言して、「眞儒復出。」といった。

成化五年己丑（一四六九）、白沙四十二歳の年、三度目の会試に応じたが、復た下第した。

成化十八年壬寅（一四八二）、白沙五十五歳の時、広東の左布政使彭韶が上疏して、「國以二仁賢一爲レ寶。臣才德不レ及二獻章一。萬萬猶叨二厚祿一。願二於獻章薄醇一、乃未レ見二收用一、誠恐二國家坐失一爲レ賢之寶上。」といった。有司が礼を以て駕を勧めたが、母老い併せて久しく病むを理由に辞退した。時に巡撫右都御史朱英がこれを心配して、強く薦めると、已むなく京師に行くことになったが、偶〻病気で行けなくなり、上疏して、「臣母以二貧賤孤寡一、俯仰無聊、殷憂成レ疾、老而彌劇。使二臣遠客二異鄉一、臣母之憂レ臣日甚。愈憂愈病、愈病愈憂。憂病相仍、理レ難長久。臣又以二病軀一、憂二老母一、年未レ暮而氣已衰、心欲レ爲而力不レ逮。夫內無二攻之疾一、則外不レ見二從レ事之難一。上有二至仁之君一、則下多二曲全之士一。願乞二養レ病。終レ養上疏。」といった。憲宗は親ら閲すること再三、明日、翰林院検討を授け、病が癒えれば、来て職を供にさせることにした。白沙は謝意を表して辞退しなかった。

南安知府張汝弼が出処を問うた。白沙はこれに対えて、「康齋以二布衣一、爲二石亨薦一、所二以不レ受レ職而求レ觀二祕書一者、冀レ得二間悟一主也。惜乎。當時宰相不レ悟二以爲レ實。然言二之上一、令レ受レ職。然後觀レ書、殊戾二康意一。遂決レ去。某以レ聽二選監生薦一、又疏、陳二始終一願レ仕。故不二敢僞辭一。以釣二虛名一、或受或不レ受、各有レ攸レ宜爾」といった。

弘治十三年庚申（一五〇〇）、二月十日没す。年七十三。没する前数日、早くから朝服朝冠を着け、子弟に支えられて香を北面に焚き、五拝三叩首して、「五辭二吾君一。」といい、又一詩「託レ仙終被レ謗　託レ佛豈多レ修　弄二艇滄溟月一　聞二歌碧玉樓一」を作り、「吾以レ此辭レ世。」といった。没する日、山頂に白気が出て、天を貫いて勃勃如として蒸し上った。その日遂に没した。（『白沙子全集』「白沙先生行狀」、『明儒学案』「白沙學案」）

二

陳白沙の学は、「虚」と「静」とである、『明儒學案』に、「先生之學、以レ虚爲レ本、以レ静爲二門戸一。」（「白沙学案一」）とあり、『白沙子全集』に、「先生之學、以二自然一爲レ宗、以二無欲一爲レ至。而其要在二致虚一。虚者無欲之謂也。致虚之功、必有レ事焉。勿レ忘而勿レ助。故稱二自然一也。三者若レ一。而致虚要焉。」（「遊江門記」）とある。

白沙の学は、「虚」を本とし、「静」を門戸とし、「自然」を宗とし、『無欲』を至れりとした。しかしその要は「致虚」にある。「虚」は「無欲」のことであり、「致虚」の修行は、「必有レ事焉。勿レ忘而勿レ助。」である。故に「自然」というのである。

區大倫はいう、人心の「虚」は「太虚」に原づく。「太虚」中のあらゆる物は、一物として「太虚」の障害になっていない。これは「虚」であるからである。しかしまだ「虚」の意味を尽くしていない。今、日月の運行、寒暑の往来、川嶽の流峙、衆庶の憑生、草木鳥獣、昆虫の暢遂繁孳等は、凡て目で視、耳で聞くことが出来るが、運行、往来、流峙、憑生、暢遂、繁孳する理由は、視ることも聞くことも出来ない。一体誰がこれをするのか。「虚」がこれをする本ではないか、したがって人心の「虚」はこのようなのである。だから心が動くと、万感万応するのは視たり聞いたり出来るが、その感応の従って出る所は、視見出来ない。則ち「虚」だけである。

然しながら、人心の「虚」は生と倶にあって、必ず「致す」に待つのはどうしてか、「虚」とは一物も留めない称で、意志が動いて物を欲して誘うと、物が心に入って、「虚」が実となる。故に「致虚」は心を養うためであって、邪動の欲が心を干すことが出来ないようにし、常に万感万応の本となるのである。この白沙の「虚」は「無欲」より出るもので、「致虚」には安排作為がなくて得られる。これが性の本体で、性は「虚」である、と。白沙は、「勿レ忘勿レ助即存存之旨、即其致レ之之功也。亦奚有二安排作爲之煩一乎。」といった。これは「致虚」が自然に帰することをいったのである。

白沙はいう、「夫道至無而動、至近而神。故藏而後發、形而斯存。」と。又いう、「夫動已形者也。其未レ形者虚而已。虚其本也。致虚之所二以立一本也。」と（「遊江門記」）。

白沙は、自ら学を為すのを、趙提学に次のようにいっている。

「僕年二十七、始めて發憤し、吳聘君に從ひて學ぶ。其の

古聖賢の垂訓の書に於て、蓋し講ぜざる所無し。然れども未だ入る處を知らず。白沙に①歸るに比び、門を杜ぢて出でず。專ら以て力を用ふる所の方を定む。既にして師友の指引無く、日に書册に靠りて之れを尋ぬ。寢を忘れ食を忘れ、是の如きこと②累年、而れども卒に未だ得ず。謂ふ所の未だ得ざるとは、吾が此の心と此の理と、未だ湊泊脗合すること有らざる處を謂ふなり。是に於て、彼の繁を舍て、吾が約を求む。惟だ靜坐之れを久しくすることに在り。然る後に、吾が此の心の體、隱然として呈露し、常に物有るが若きを見る。日用の間、種種の應酬、吾が欲する所に隨ふこと、馬の銜勒を繫するが如きなり。物の理を體認し、諸れを聖訓に稽ふれば、各〻頭緒來歷有ること、水の源委有るが如きなり。是に於て、燦然として自ら信じて曰く、聖の功を作す。其れ玆に在るか、と。」（『明史』「儒林二」）

注① 居ること半載にして歸る。（『明史』「儒林二」）

② 「改葬白沙先生墓碑銘」には、「十載」、「遊二江門一記」には「十余年」とある。

張東所は、白沙の為学を叙して、「聘君より歸後を見るに、一室に靜坐し、家人と雖も其の面を見ること罕なり。數年未だ之れを得ること有らず。是に於て、夙風を迅掃し、或いは長林に浩歌し、或いは絶島に孤嘯し、或いは艇を弄して、竿を溪涯海面に投じ、耳目を捐て、心智を去り、之れを久しくして、然る後に得る有り。蓋し主靜にして大を見る、斯の力を致すにより、乃ち廣大高明を大悟す、日用を離れず、眞に萬事を一にし、眞に自ら圓成に本づき、人力を假らず。動靜無く、內外無く、大小精粗、一以って之れを貫く。先生の學は、博よりして約、粗より入りて細、其れ禪に同じからざること此の如しと。」（「白沙學案一」）

白沙の「靜」は、周濂溪の「主靜」に基づく。以来程門の諸公は、互いに相伝授し、予章、延平に至って、専ら人に教えたが、朱子は間違って「禪」に入るのを恐れて、「靜」を説くことは少なく、ただ「敬」を説いた。

「伊川先生、每見二人之靜坐一、便歎二其善學一。此一靜字、自二濂溪先生主靜一發源。以來程門之諸公、遞相傳授。至二豫章延平一、尤專提レ此敎レ人。學者亦以レ此得レ力。晦翁恐二人差入レ禪去一。故少レ說レ靜、只說レ敬。」（同「與二羅一峯一」）

「靜坐」はともすると、「禪」と間違えられるので、これについて趙提学僉憲に出した返信に、次のようにいっている。

「僕を毀るを爲す者有り。自ら門戸を立つる者は、是れ

禪學に流るる者なりと曰ふ有り。甚だしきは妄人と曰ふ。人を僞者に率ゐるなり。僕安くんぞ敢て之れと強辯せむや。姑く之れを考へ、近似なる者を以て之れを言はむ。孔子は人に敎ふるに、文行忠信なり。後の孔氏を學ぶ者は、則ち一を要と爲すと曰ふ。一とは無欲なり。無欲なれば則ち靜虛にして動直、然る後に聖は學んで至る可し。謂ふ所の自ら門戸を立つる者とは、此の類に非ざるか。佛氏は人に敎ふるに靜坐を曰ふ。吾も亦た靜坐を曰ふ。惺惺を曰ふ。吾も亦た惺惺を曰ふ。調息は數息に近し。定力は禪定に似たる有り。謂ふ所の禪學に流るる者とは、此の類に非ざるかと。」（同「復二趙提學僉憲一」）。

さて陳白沙は、どのように勉励して、彼の学説を樹立したであろうか。

「先生の始めて學を爲すや、激勵奮發の功は、多く之れを康齋に得。臨川より歸り、足跡城府に至らず、朱某（英）時に參議たり。廬に造りて見を求むるも、卒に避けて見れず。戸を閉ぢて書を讀み、盡く天下古今の典籍を窮むる旁ら、釋老稗官小說に及ぶ。夜を徹して寢ねず。少しく困めば、則ち水を以て其の足に沃ぎ、之れを久しくして歎じて曰く、夫れ學は自然を貴ぶなり。之れを自得して然る後に之れを博むるに典籍を以てすれば、則ち典籍の言は、我が言なり。否らざれば則ち、典籍は自ら典籍にして、我は自ら我なり。遂に一臺を築き、名づけて春陽と曰ふ。日々其の中に靜坐して、足閾外に出でざること數年なり。故に其の某の學ぶに答ふる詩に曰く、「古人棄二糟粕一　糟粕非二眞傳一　眇哉一勺水　積累成二大川一　亦有レ非二積累一　源泉自涓涓　至無有二至動一　至近至神焉　發用玆不レ窮　緘藏極二淵泉一　吾能握二其機一　何必窺二陳編一　學患レ不レ用レ心用レ心滋牽纏　本レ虛形乃實　立レ本貴二自然一　戒愼與二恐懼一　斯言未レ云レ偏　後儒不レ省レ事　差失二毫釐間一　寄二語了レ心人一　素琴本無レ絃」（「白沙先生行狀」）

暫くして、又嘆じていうのには、「夫れ道は動靜無きなり。之れを得る者は、動も亦た定、靜も亦た定。將迎無く、內外無し。苟も靜を欲するは、卽ち靜に非ず。是に於て、動に隨ひ靜に隨って、以て其の功を施すと。」（同）この語の中には、明道の『定性書』に、「所謂定者、動亦定、靜亦定。無二將迎一、無二內外一。」とあるのと全く同じ部分がある。従って陳白沙は明道の思想を継承していることが分かる。

陳白沙の学の伝承と発展については、次のようにいっている。

「蓋し其の學の初めは、則ち周子の主靜、程子の靜坐の

說に本づき、以て其の基を立つ。その自得の效は則ち見大心泰の說に合す。故に凡て富貴功利得喪死生は、擧げて以て其の心を動かすに足らざるものなり。其の後造詣日に深ければ、則ち又以て顏氏の卓爾として、之れに從はむと欲すと雖も由る末きなるを、己の地位に進めて、駸駸乎として孔子の意必固我無きの氣象たり。其の學に本原有り。進むに次第有り。的然として據るべきこと此の如しと。」（同）。

白沙の学の端緒は、周濂溪の「主靜」と、程明道の「靜坐」の説に本づいて基礎を立て、而して「自得」の効により、何事にも心を動かすことがなくなり、遂に孔子の「意必固我」無きの気象になった。

ここで刮目すべきことは、「其の學に本原有り、進むに次第有り。的然と據るべきこと此の如し。」といっていることである。これは白沙の学問する方法をいったものであるが、同時に、学究者に対する一般的な基本姿勢として受け止めたい。

三

湛甘泉は、諱は若水、字は元明。初名は露、字は民沢であったが、祖諱を避け雨と改め、後ち更に若水と定めた。広東省甘泉郡増城県新塘の人。四方の学者が甘泉を宗としたので甘泉先生と称した。

祖先は莆（福建省）の人。元徳（諱、露）、卜して沙貝村に住み、沙貝の始祖となる。曾祖は懐徳、元末の乱に義兵を挙げ、沙貝村を守ったので義士の祠がある。祖は樵林公江、父は怡菴公瑛、共に先生として尊ばれ、資政大夫、南京礼部尚書を贈られ、祖母は梁氏、母は陳氏、倶に夫人である。

明の憲宗の成化二年丙戌（一四六六）、十月十三日巳の刻に、沙貝村に生まれた。人相が甚だ人と違っていた。顙中に二つの臚隆があって、それが輔弼しているようであり、両耳の傍に各々黒子があり、左の七つは北斗に、右の六つは南斗に似ていた。

十四歳で始めて小学に入り、十六歳で府庠に遊学。孝宗の弘治五年壬子（一四九二）、二十七歳の年、郷試に合格し、第四位で挙人に挙げられ、鹿鳴の宴の時、優楽を用いたので、甘泉は「賓は盛典を與にして戲むる可けんや。」といった。この徳器雅重は台輔になる望みがあった。

弘治七年甲寅（一四九四）、二十九歳の二月、往いて陳白沙に学び、「此の學は①「全放下」に非ざれば、終に湊泊し難し。」といい、遂に会試の檄文を焼き、出仕を断念し、

一室に独居し、心を千古に馳せ、聖賢の修行を黙約し、総括して陳白沙の「隨ン處體ニ認天理ニ」の六字の祕訣を悟った。時に三十二歳。この報を受けた陳白沙は、「此の一鞭に着く。何ぞ古人の佳處に到らざるを患へんや。」と喜んだ。

注① 拙著『湛甘泉の研究』参照。

弘治十八年乙丑（一五〇五）、甘泉四十歳の年母に出仕を勧められ、会試に応ずることになった。時の祭酒楓山張公懋が試みに、「睟面盎背論」を以てした。これは天下に魁けた珍しい会試であった。学士張元禎（東白）は、甘泉の「中者天下之大本論」を讀み、「眞儒復出矣。」と感嘆した。第二位榜眼で合格する。翰林院庶吉士となり、次いで編修となる。この時、王陽明（三十四歳）は吏部に居り、学を講じていた。二人の初会はこの時である。

正徳七年壬申（一五一二）、安南国王の正使として安南に使す。嘉靖元年壬午（一五二二）、復び編修となり、翌年翰林院侍読。三年甲申（一五二七）、五十九歳、南京国子監祭酒。後ち吏部・礼部右侍郎、本部左侍郎を経て、嘉靖十二年癸巳（一五〇〇）、南京礼部尚書に昇進。六十八歳。後ち吏部・兵部尚書を経歴し、嘉靖十九年庚子（一五四〇）、致仕。七十五歳。嘉靖三十九年庚甲（一五六〇）、四月二十二日、禺山精舎（広州）で没した。九十五歳。

この日、沐浴後、夕方、大星が西北に隕ち、その光が遍く地に広がった。その頃長逝した。この様子を羅洪先は、「墓表」で次のようにいっている。

「嘉靖庚申四月念有二日戊の時、一星東南より來る。其の大きさ斗の如し。其の光天を燭らし、其の聲雷の如し。城を擧げて皆驚く。文院に殞つ。先生卽ち正寢に終る。夫れ先生の生まるるは、中星の見るるに應じて生まれ、其の歿するや、中星の殞つるに應じて歿す。天運の氣機なりと。」（『甘泉文集』第三十二巻「外集」〈墓誌銘〉）

更にその死を痛む情景を、「闔城の內外、奔哭する者、萬を以て計る。海內の諸生、衰絰を服して、朝夕哀しみ臨むこと、考妣を喪ふが如し。道德の人を感ぜしむるや、其れ涯り有らむやと。」（同）。洵に切々と胸に迫る。

四

湛甘泉の学説は、「隨ン處體ニ認天理ニ」である。これは先師陳白沙の説であるが、陳白沙はこれについて解明をせず、ただ「自得」を求めた。陳白沙は苦難のあげく、「自得」を体認したからである。湛甘泉は思索冥想の結果、この説を了悟した。初めは「體ニ認天理ニ」で良いとした。し

かし後日、これでは不十分なことを覚り、「隨處」の二字を加えたのである。

この「隨處」の二字を加えたことについては、門人の愛弟子洪垣が、「墓誌銘」に次のようにいっている。

「初爲體認天理。後覺其未盡、復加隨處二字。」(同、巻三十二「外集」〈墓誌銘〉)

「自得」については、白沙は「夫學貴自得也、學者苟不但求之書、而求之心、察於動靜有無之機、去耳目支離之用、存虛圓不測之神、一開卷盡得之矣。非得之書、得自我者也。」(『白沙子全集』「陳文恭集序」)といっている。「自得」は書によって得るのではなく、「自ら我に得る」ものなのである。

「體認天理」においては、白沙は「其玆可以至聖城。」と(同)だけいって、何等の説明もしなかった。やはり「自得」を重んじたのである。しかし甘泉は自ら次のようにいっている。「自言曰、臣之爲說、雖多其要、不過體認天理四字。最爲簡易。」と。(同)

この「體認天理」の旨は、朱子の師、李侗(延平・一〇八八―一一五八)が初めて己れの学説としたと見られる。何維柏はいう、「柏少時、稍知學、村居無師友。杜門謝談性理、篤信李延平默坐澄心、體認天理之旨、夙夜端省、弗敢有懈。」と(『白沙子全集』「改創白沙家祠碑記」)。この「體認天理」を陳白沙が受け、更に湛甘泉が了悟して自説としたのである。

「隨處」については、白沙の「隨時隨處、無一不是理充塞。」が根拠となり、「體認天理」は、白沙の「體認物理」の説法に基づき、「天理」は天地自然の本体の真理であり、道であり、物であるので、「體認」は即ち「格物」と悟ったのである。また「隨處體認天理」は、陳白沙の説を了悟したのではなく、湛甘泉の独創であるという学者もいるが、筆者はこれに賛成し難い。

五

弘治十三年庚申(一五〇〇)、師陳白沙が没した時は、湛甘泉は三十五歳であった。この前年、白沙は次のような詩を詠んだ。「小坐江門不計年　蒲裙當膝穿幾回　如今老去還分付　不賣區區敝篝錢」その跋に、「達磨西來、衣を傳ふるを信と爲す。江門の釣臺、夫の衣鉢に病む。今、湛民澤に付與す。收管せば、將來無窮の祝有らむ。」(『甘泉文集』巻三十二、「外集」〈墓表〉)とある。甘泉に期するところ、洵に大なるを見る。

そこで甘泉は、「道義の師、我を成すか。我を生む者と

等し。」（同）といって、斬衰の服を作り、廬墓三年、室に入らず。父に喪するようであった。その後また楚雲台に帰り、独居すること三年、母陳氏が心配し、僉憲徐君紘と出仕を勧めた。

学の道統について、甘泉は次のように述べている。

「先生之道卽周程之道。周程之道卽孟子之道。孟子之道卽孔子之道。孔子之道卽文武禹湯之道。文武禹湯之道卽堯舜之道。曰二道烏在一。曰二道生於心一。既曰、人者天地之心。故上下四方之宇、古今往來之宙、同一天地、同一氣也。同一心也。是故、堯舜之心卽禹湯文武之心。禹湯文武之心卽孔子之心。孔子之心卽孟氏之心。孟子之心卽周程之心。周程之心卽白沙先生之心。白沙先生之心、卽侍御孝豐吳君之心。初無二二心一。初無二二道一。在二覺而存一之耳。不レ然則侍御生二乎數十年之後、千里之遠一、胡爲而有二此心一哉。」（『白沙子全集』「粤秀山白沙書院記」）

湛甘泉は陳白沙の第一の弟子である。それは、陳白沙の没後、門人の衆議によって、「白沙先生行狀」を書いたことを始め、「白沙子古詩教解」「重刻白沙先生集序」「僎二石齋先師一文」「改葬白沙先生墓碑銘」「粤秀山白沙書院記」「建二祠白雲山一塑二石齋陳先師像一成祭文」等を作り、又扁額「碧玉樓」を書いたことや、陳白沙が甘泉に与えた書簡、詩などを読むと、如何に甘泉が陳白沙に愛され、また陳白沙を敬慕したかが窺われ、師弟愛の美しさに、涙襟に満たしむの感を深くする。「白沙先生行狀」には、その様子を次のように書いている。

「嗚呼、先生の若きは君子にして、周子の後ち一人のみと謂ふは非か。某や似ること無し。成化甲寅（一四九四）より、我が先生を白沙に見る。我が先生は、卽ち國士を以て其の後を待つ。教へを受くること多くして、愛を辱なくすること厚し。歿するに臨み、具に書趣至る。白沙寄するに、斯の文を以て告ぐ。門人羅冕に曰く、吾が道、吾れ吾が某に付す、と。示すに詩を以て云ふ。「往古來今幾聖賢　都從二心上一契二心傳一　孟子聰明還二孟子一　如今具莫レ信二人言一」又曰く、「萬丈祝融何處山　三年碧玉夢相關　多少畫工傳不レ去　都沒賢今畫幅寬」又曰く、「病久惟聽レ命　詩成不レ浪レ傳　門前花十丈　玉井正開レ蓮　數椽剛到レ地　一棟正橫レ天　不レ亡吾道在　萬萬歲相連」

因りて其の手を執りて曰く、宇宙に出づる者は子なり、と。既にして曰く、孔子の道至れり。願はくは蛇を畫きて足を添ふること毋れ、と。又た曰く、用ふれば斯に行はれ、舍けば斯に藏る。子其れ之れを勉めよ。吾が言止だ是れなり。嗚呼、言猶ほ耳に在り。不肖某、斗筲の器、何を

修め何を爲さむ。而して後、以て少しく我が先生の負託の重きに副ふ可きか。先生歿して後、門人聚議して、湛雨を以て行狀を爲らしむ。」（『白沙子全集』「白沙先生行狀」）

注　この行狀は甘泉は倉卒なことが多かったため、門人張詡（廷實）が補葺して、弘治十四年辛酉（一五〇一）に成った。

陳白沙には著書がない。その理由は二つある。一つは自分の考えを詩に寓したこと。他は自ら著述は必要ないとしたことである。「白沙先生は著作無し。著作の意を詩に寓す。是の故に、道德の精は必ず詩に於て之れを發す。天下後世之れを得、是れに因って以て傳へ、是れを敎へと爲す。」（同「詩敎解原序」）といい、また「曾て道の顯晦は、人に在りて言語に在らざるを以て、遂に意を著述に絕つ。」（同「白沙先生行狀」）といっている。文中、詩の多いことで納得されよう。

結　語

湛甘泉が生まれた時は、陳白沙は既に三十九歳であった。したがって三十八歳年長である。弘治五年（一四九二）、舉人に舉げられ、二年後、白沙に入門した二十九歳の時は、白沙は六十七歳になっていた。この頃白沙は、三十余年講學をし、從學の士は千を數え、中でも、百六人は有名人として『新塘縣志』に記載されている。湛甘泉の入門前には、主たる弟子に、李承基、張廷實、林緝熙、李孔修、謝天錫等がおり、殊に李承基を愛し、早くより付託の心があり、彼のために特に楚雲台を築き、ここに住ませて榜聯に「有二月嚴光一瀨　無レ全二郭隗臺一」（「白沙先生行狀」）を書き、將來を嘱目した。然し諸々の事情で、相先後し白沙のもとを離去し、一人も宗子と願う者がなくなった。その時、甘泉が來學し、「參前倚衡の學者」となし、遂に楚雲台を与え居住させ、掛け替えのない継承者と看做した。それは既述した湛甘泉の優れた德性と品行が決定したのである。

湛甘泉は、三十二歳で「隨レ處體二認天理一」の説を了悟して以來、九十五歳で没するまで、終生この説を堅持した。而してこの学説を体系づけ裏付けたのが、「心性圖説」と「四勿總箴」である。甘泉は世宗の嘉靖三年甲申（一五二四）、五十九歳の年、南京国子監祭酒に昇進し、六十三歳まで在任した。この両書はこの期間に作られたものである。『明史』列伝、「湛甘泉」の条に、「己遷二南京國子監祭酒一、作二心性圖説一、以敎レ士。」とある。

「心性圖説」には、「心也者、體二天地萬物一而不レ遺者也。性也者、心之生理也。心性非レ二也。」とあり、又「心也者、包二乎天地萬物之外一、而貫二乎天地萬物之內一者也。中

外非二一也。天地無二內外一。心安無二內外一、極二言之一耳矣。」とある。一方「四勿總箴」には、「心含二天靈瀕氣之精一、與二地廣大一、與二天高明一、惟清惟靈、貫二道百體一。非禮一念、能知二太始事一。顏後不レ遠、百世之師聖遠、言湮二多岐支離一。一實二四勿一、毋レ貳。」とある。

「心性圖說」と「四勿總箴」の関係は、「四勿總箴」の後序に、「此二圖、乃聖學功夫、至切至要、至簡至易處。總而言レ之、不レ過二只是隨レ處體二認天理一。心性圖專明二道體一、四勿總箴圖、專明二功夫一。」といい、「二圖各有レ不レ同、然實相表裏、實相發明。此通レ一、無二二之實也。」といっている。

而して「自然堂銘」に、「先師白沙先生云、學以二自然一爲レ宗。當時聞者、或疑焉、若水服二膺是訓一、垂二四十一年一矣。乃今信レ之益篤。」（『甘集文集』巻二十一「雜著」〈自然堂銘〉）とある。これによると、甘泉は四十年間、陳白沙の「自然」の訓を服膺し、これを信じること益々篤くなった。甘泉は二十九歳で入門したから、六十九歳ということになるが、この年は、南京礼部尚書に昇進した翌年で、文官として最高の地位を極めた栄光の頂点にあった時である。

付記

昭和六十三年（一九八八）、八月上旬、湛甘泉の生地新塘、門弟教育をした「大科書院」のある西樵山、江門の「陳白沙先生紀念館」の碧玉楼等をこの目で直に見、極めて心を打たれたが、湛甘泉に関しては、殆んど無関心で遺跡は荒廃していた。筆者の著書『湛甘泉の研究』『湛甘泉の學說』『湛甘泉と王陽明の関係』『湛甘泉の教育』等を、新塘中學校に寄贈し、再会を期して帰国した。

豈に計らんや、平成六年（一九九四）、三月十日、『湛甘泉研究文集』が、新塘中学校長李鎮欽氏より贈与されて、驚駭した。繙くと、「紀念湛若水先生五二五周年学術思想研討会」が、一九九二年六月二十七日より二十九日まで三日間、湛甘泉の郷里新塘鎮で開催され、その時の模様や研究発表論文等が、詳細に書かれていた。

これを想う時、筆者が新塘中学を訪れ、拙著を贈呈したことが、この研討会開催の動因になったのではと想像され、欣快措く能わざる感を抱くと共に、漸く中国本土においても、この研究に取り組む姿勢の機運が出たことが窺われ、今後の発展を期して已まないものがある。